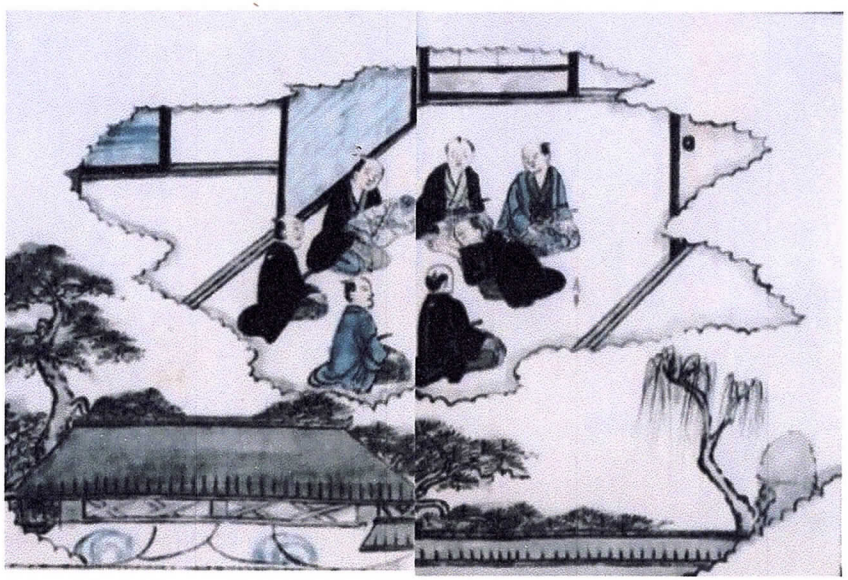
講話会　神辺宿ヒストリー　その①

本陣を活用した文化発信事業

大名の神辺本陣での過ごし方

講話者　会員　菅波哲郎

主催　神辺宿文化研究会

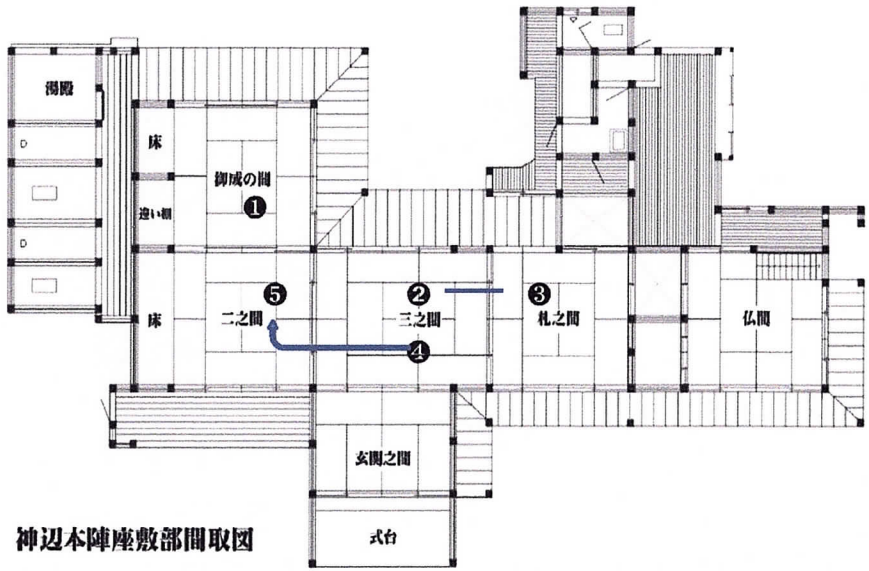


1．福岡藩黒田家、本陣主人に上下（かみしも）の下賜の場合

嘉永元年
１８４８

申之上刻
15時台

①嘉永元年十月二日、登り、御泊、当駅申之上刻
②殿様御鳴間、御静にぞ被レ為レ居、
③御次二間床、道中御家老小川主計様、并次御家老宮内重良右衛門様、道中御用人山崎権兵衛様、久野善右衛門様、吉永源八郎様、斎藤杢左衛門様、御歴々之御立会、
④本陣序平と呼びなさられて序平は罷出、ニタ間を隔て拝すれは、猶又是へと呼召され、是へくと進られ、御膝元へ罷出、両手を突て拝すれは、時に御家老小川様、御下
⑤御殿様之御紋附、御上下を手に持たれて、「是々序平」と呼召され、手づから手にぞ頂戴し、其前下に置ぬよふ、手に持へしと仰された、
⑥時に家老小川様、此度序平と改て、仰聞される其事は、扨御本陣是序平、年来御本陣之達二御用を追々出精いたすへし
⑦是に依て御拝料、御紋附御上下に銀拾枚、下し置るゝ事の有。
⑧殿様御前に御列座、御殿様へ之御噺、暫有て御家老様、御両士早速御宿へ、御下りける事之あり。



神辺本陣座敷部間取図

２．福岡藩主黒田　　中秋の名月に無礼講の一時

①東都表に御参勤、安政三年の、辰の中秋三五の宵、
②其宵清光御月見、定而御酒宴有べきと、御台所之料理方、海魚山肴取揃、来客酒肴之御構、
③時に御大守様に置、御心にも叶ひしか、少々笑を御含、差出す肴を止メ置け、拙者料理と御好、御意有事に有けれは、早速白木広板に、庖丁・生箸相揃、差出す事の有けれは、早速御前は御料理、
④時に御側の御衆中、御前之近く取纏、夫よ是よと申上、御手伝もこれ有し。
⑤早速御披露御廻文、今宵大守之御月見、御酒宴成さられ事に付、尚更御手づの御料理、下され給ふ事のよし、
⑥御家老始御用人、御歴々の御大身、御前へ早く御到来。時に廻文至るより、各急く御本陣、思ひくに入りなされ、
⑦最早黄昏暮近く、東峰月の出るより、万里清光雲晴て、掛る障もあらさらす。
⑧時に殿様御満悦、追々御酒宴始りて、金盃数を取出し、夫よ是よと相伝へ、尚又御家老・御用人、御頂戴と御好、中に御客御衆中、扱々肴之御料理、扱もやいかにと御賞し、

安政三年
1856

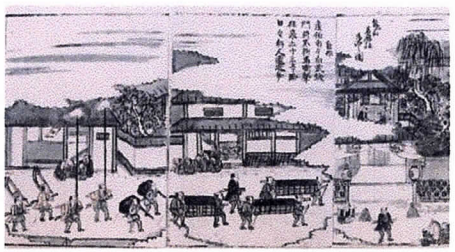
中秋三五の宵
中秋の名月のこと。
三五夜(さんごや)の月。3と5の積が15となるところから。

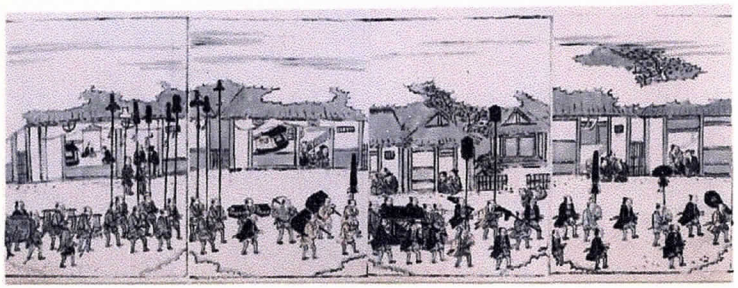
⑨尚又是にも御頂戴、追々廻る杯の、陰にや浮ぶ月かけの、三更五更となる優に、益々酒宴は尚深し、大酒乱酒と成ぬれは、笑語の声も尚繁し、
⑩最早夜半と過ぬれは、駅里町家の御下宿、一番二番の触を聞、追々出立御同勢、未夕御前は夢ならす、清光空を御詠、月にうかれて終夜、哀声糸竹の御楽。

【更】一夜を5等分した、時間の単位。午後7時ないし8時から、順次2時間を単位に、初更から五更までである。…
初更　8時～10時
二更　10時～0時
三更　0時～2時
四更　2時～4時
五更　4時～6時

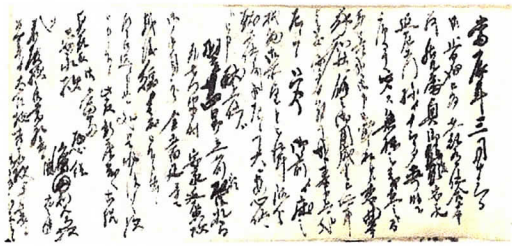
糸竹
和楽器の総称
「糸」は琴・三味線などの弦楽器、
「竹」は笛・笙(しょう)などの管楽器

福岡藩主黒田長知（第12代藩主）の場合（嘉永7年(1854)4月13日泊）



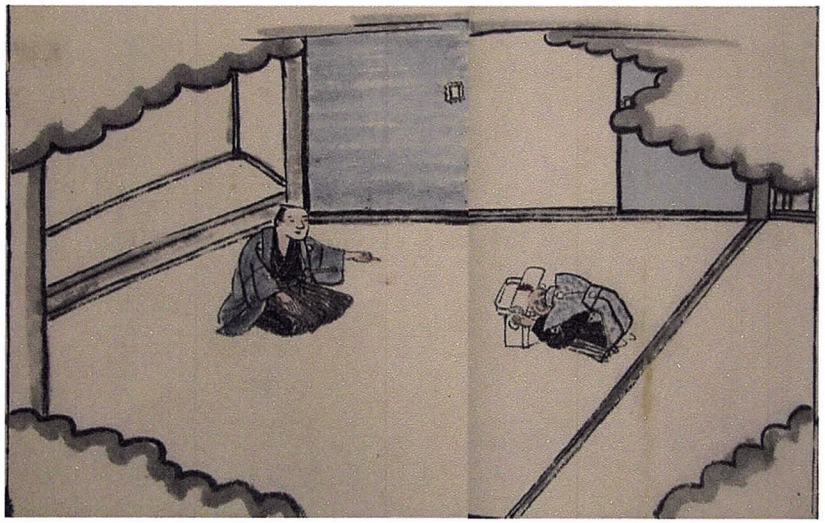


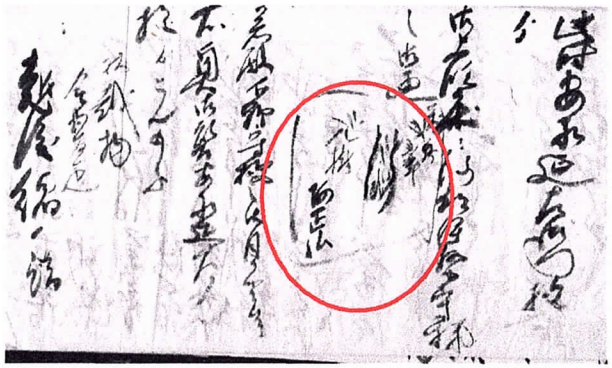
3. 信道、松平下野守の真筆を希う（安政３年1856３月**13日泊**）



一刻≒2時間
半刻（はんとき）≒1時間
四半刻（小半刻）≒30分
五つ時　午前７時～９時

当辰年三月十三日御止宿被為在難有仕合奉存候。然ル処奥御取安永延左衛門様より十三日五つ時に、序平へ咄ス。無躰之義在之候間聞呉候哉候。御申上為聞私共委曲事承知仕候。何之御用成共被仰聞被下度、偏に奉願上候口奉申上候処、左候ハヾ只今御前より床之掛物御所望と被仰聞、随分献上仕候度候哉。左候ハヾ大に安心仕候相成し。(中略)。時に御側様に置、扨昨年は殿様の、御真筆を其一軸相願ひ、然るによって此度は、御下ヶ被下事の有、聞より序平は再拝し、見れは白木の三宝に、紙水引に相包、其一軸を給し、時に序平は再拝し、拝て拝して奉り、御墨附を頂戴す。松平美濃守様御直筆竹石の御画乍恐も書写す。





此時安永延左衛門様より御上段床之阿部伊勢守様之御画若殿下野守様之
御目にとまり右奥御取安永延左衛門様よりこんもう(懇望)
　頂戴物
　　金五百疋
　　越後縮　一端

※金1匹は江戸時代の大部分では10文　　500疋×10文＝5000文
　銭1文は約12円　　5000文×12円＝60000円

祈願寺明王院の場合

福山藩主二代目阿部正福は享保12年(1727)に祈願寺明王院に参詣する。その時目にした「狩野探幽筆三幅対」を「懇望」した。明王院は「塔御修復ニ候願も御座候」の事情から、「若御見明被遊候節ハ、於当寺ハ外ニ無御座大切成絵ニ御座候、御戻シ被下候様ニ申置候」との願いを付して差出した。(『広島県立歴史博物館　研究紀要　創刊号』より)。正福と明王院、黒田長知と本陣信道。この二つの在り方は何かが異なる。阿部正弘画も狩野探幽画も大切な座敷飾りの軸であった。

4.山陽道　矢掛宿本陣の場合

安永2年（1773）巳五月十四日　松平安芸守様御休

献上　鯛一折弐枚　　但、折紙に記上。
拝領　銀弐枚
御はたご賃　御上分御壱人前七拾文つゝ
御本陣仕出　三拾三人前御上分也。是は御近習様也。
献　立　御上と唱申候。此分一汁五菜こうもの共。
　　大こん
膾　　う を　　汁　とうふ才の目
　　せうか　　な
　　せ り
猪口　ちさ　　御飯
　　干大こん
平　鯛
　　竹のこ
　　なすび
　　こうもの
御次拾六人　茶漬　吸物　向　香物
　　御壱人前三拾五文っゝ

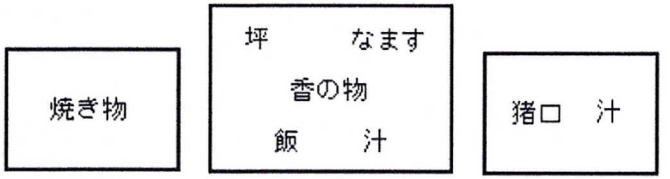
②芸州女中様御昼休　安永9年（1780）子九月廿一日

芸州御女中様御昼休被仰付候。尤御家中御家内之よし御触之趣、堀越御休之積にて御座候所、堀越差支之儀有之に付当宿休被成度旨、宿継にて廿日夜中過御女中様御附添鵜山源内様・寺川左一郎様より此方へ手紙にて被仰遣、此方にて御昼休被成候。
御旅籠廿四人　内、十八人　上分八拾五文づつ
　　六人　御払不被成候
向焼物　せひ　　汁　みそ

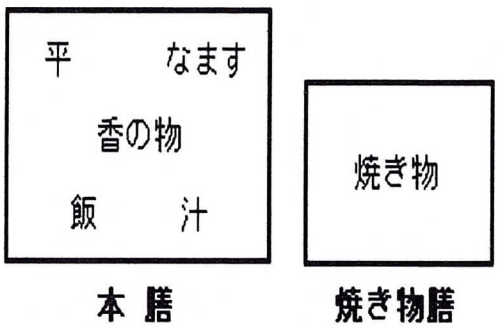
　　とうふ
平　　松たけ　　御飯

献上　名酒御断にて御受不被成候。
拝領　金百疋被下候。

【一汁五菜 とは】
本膳……なます、汁、坪、飯、香の物、焼物、平、猪口、吸物、台引、酒、菓子、薄茶
【説明】
1．坪　二番目の膳につける「平」と区別して、本膳につけられる煮物のことを、「坪」という。
野菜の煮物やしんじょ（魚肉のすりつぶしの蒸物）のあんかけを、蓋付きの深い器、すなわち、坪（坪は、壷とも書き、壷形の器）に盛りつけて出す。
2．猪口（ちょく）... 器の名称で、イノシシの口に似ているところから猪口と呼ぶ。
飲酒用の杯や付け醤油の容器をさす場合と、酢の物、和え物など小さな器に盛る料理をさす場合がある。
3．台引 ... 口取（蒲鉾、金とん、羊かん、伊達巻きなど）がつく。



一汁三菜
本膳取肴、吸物、酒、菓子、薄茶
【説明】
1.「なます」..... 鱠または膾と書き、魚を使ったときと、野菜を主に使ったときを区別する。和（あ）え物か酢物で、小鉢か小丼に盛る。
2.「平」（ひら）..... 煮物のこと。海、山、里のものを5種類ほど、取り合わせ、平たい蓋付きの椀に盛る。
3.「取肴」（とりざかな）..... 口取肴で、はしからとる（小口から取る）肴ということであり、酒の「肴」のことをいう。



安永3年（1774）九月十六日　遊行上人様御昼休　御本陣　多聞寺

亭主　石井源二郎

献立

酢和　大こん／くり／せうか／か き／にんしん

汁　味噌／焼豆腐

坪　焼くり／平いも／きくらけ

御飯

こうもの

二汁　すまし／ゆば／しめし／きんなん

二の汁は上人様斗
茸其外一汁五菜、二汁を除斗也

平　焼くり／長いも／大しいたけ／くわひ／丸麩／牛蒡

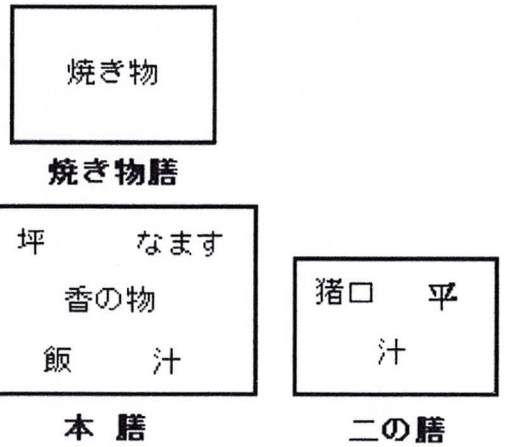
猪口　青あへ／なし／れんこん

茶碗　うすくづ／松茸／はしき豆

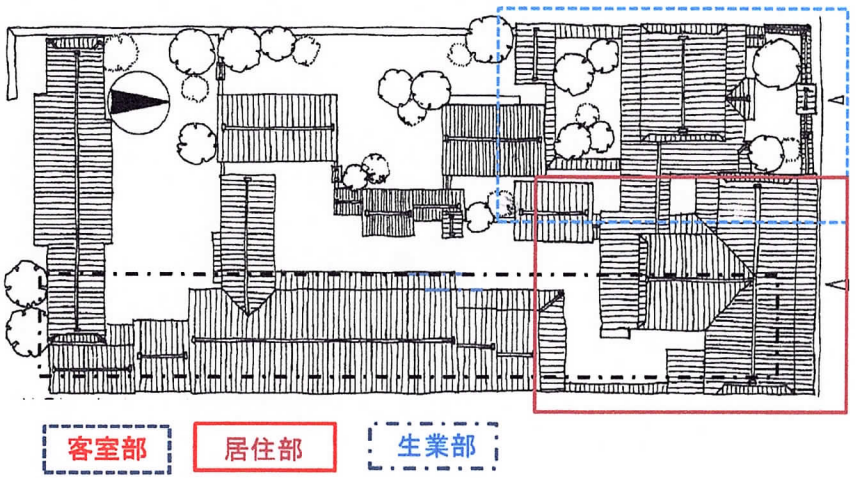
御酒　硯蓋　御菓子　御所柿出し申候

右之通、二の汁は上人様斗、其外は御本陣并御下宿共一同に一汁五菜被仰付候。料理もの笠岡へ取に遣す。御本陣下宿とも相応に割合相渡申候。御酒之儀は全体禁酒之儀と相聞へ候得は、相窺差出分内々被召上候衆中多御座候。

二汁五菜
一汁五菜の献立に、「二の汁」を加え、「二の膳」にしたもの
本膳 .....なます、汁、坪、飯、香の物、焼物
二の膳 ..... 平、汁、猪口、吸物、台引、酒、菓子、濃茶、後菓子、薄茶



矢掛宿石井本陣屋敷図



上段の間

『朝鮮新報』2002年5月8日刊掲載」咸鏡道から、1808年11月、日本の美含郡一日市浜（現兵庫県城崎郡香住町一日市）に漂着した朝鮮人がいて、その文章が残っている（「歴史の窓」参照）。氏名は不詳。ハングルしか知らない漁民のようで、文章も拙（つたな）く、文字も決して達筆とは言えない。一部、仮訳をつけて紹介する。

「ああ哀しや、父母や弟を考えると…。私は生きているのに、父母や弟は私が死んでしまったものと、昼も夜も痛哭して…涙を流すだろう。…お母さん！　私が死んでしまったと□□□悲しみにくれていらっしゃるだろう。…父母に不孝者となって、数万里も他国に来てしまった、…再会できようとどうして考えられよう」以上、断簡しか残らぬが、その歎き、悲しみは十分伝わって来る。この男が無事帰国できたかどうかは不明である。長い朝・日関係史上、海を通路とした人々が遭難・漂流し、地理的に最も近い、日本（或は朝鮮）に漂着する、つまり、「内湖」や近接した海路も、時には恐ろしいよという、これらはそういった歴史の一こまなのであった。（歴史学者）＝おわり（「朝鮮新報」HPより）

5.長崎に向う朝鮮漂流民　　**『神辺本陣御用留帳』より**

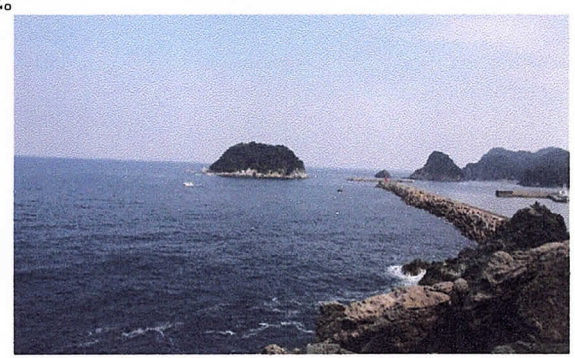
①文化５年　但州美含郡一日市村濵漂着民

金龍三　白無木　黄得昌　　李詰同　金才得　金光宅　牀天生　牀大詰
金大已　金一ニ　金奉世　　女文子　女先周

右漂流人ハ咸鏡道永興人。（中略）。右文化五年辰十一月七日但州美含郡一日市村濵漂着ス。

※咸鏡道　朝鮮半島の島北部に位置する。現在は北朝鮮の咸鏡北道・咸鏡南道・両江道の地域。

『菅茶山日記』
朝鮮人十二人を観る。漂い但州ニ着く。経(警)護して長崎に送る也



漂流人賄右用意致置喰事方と申役人参、汁平皿斗此身器物ニ入、食碗を除キ坪皿ハ略す。先方より大茶碗を持参、役人食を盛り各膳へすへ匙を付夫々へ為隔、外ニ盆物湯水共手提ニ入持参し、役人指図ニ而取計候。ふり(鰒)・しび(鮪)・大こん抔好物之由ニ而及其ニ候処、ふり・しび等時節ニおくれ候而無之、猪口の三ッ大こん大切ニ致牛房等平皿ニ残ス。

【旅籠代】
右旅籠拾貫五百文　　五拾人分
同　弐貫七百三拾文　　拾三人分
〆拾三貫弐百三拾文　但し壱人前弐百拾文つゝ

【献立】
晩　鱠　大こん　　汁　こまこま
うを　　青ミ
坪皿　□□□　御飯
□□こんぶ
にんじん
平皿　切身
□□
牛蒡

朝　猪口　いり魚はせ　　汁
したし　　御飯
平皿　生いも
牛蒡

②文政12年（1829）3月4日丹後国袖志村浜朝鮮漂流民

漂流民14人と幕府領簑笠之助手代11人

漂流人朝鮮国慶鏡道咸興府雲田社松十里之人魚売商いたし候。人物二艘分十四人、丹後国袖志村へ漂着ス。朝鮮国極月九日晩ニ浮ヶ袖志村へ同廿三日之晩ニ上ル。丹後国御公領所簑笠之助様御支配所其御手代八戸藤吉様御添役ニ長崎迄御送被遊候。

※簑笠之助様御支配所　簑笠之助は幕府領代官。代官所は京都市京丹後市久美浜町西本町に所在し、丹後・但馬の一部を支配し、石高は七万石。

【献　立】三月四日夕賄

生酢	生□	猪口	かき	平皿	水な
	にんじん		こんにやく		しくち
	大こん				里いも
吸物	きり身	鉢肴	造身	鉢	ぬた
	湯葉		うど		わけぎ
	みつば		ちさ		たこ
			三島のり		
御酒		二ノ椀	花えび		
			丸うど		
			しい茸		

唐人ニハ吸物なし。膳之上ニて肴出ス、外肴ハ皆々同様ニ出ス。

朝　賄

いり肴		猪口	したし	平皿	焼豆ふ
					にし
硯ふた	九年母				牛蒡
	川茸				里いも
	玉子				こんぶ
ニノ膳	玉子		御酒		
	ふわふわ				

夕朝都合にて

　但し壱斗弐舛程酒出ス

文化５年　但州美含郡一日市村濵漂着民

本陣の晩夕食の献立は御飯・汁のほかに鱠（なます）・坪（つぼ）皿・平皿のいわゆる一汁三菜であり、朝食も一汁三菜である。

文政12年(1829)3月４日丹後国袖志村浜朝鮮漂流民

夕食は一汁五菜と酒に二の椀で、朝食は三菜と硯蓋に、二ノ膳と酒が出され、文化６年一行の献立より数段の御馳走である。